

No. 48	昭和58年6月20日 発行
ねじればね	編集：後藤光男 〒591 堺市百舌鳥西之町1丁98-2
	電話：(0722)57局7009番 陵南住宅1号棟116号
June, 1983	発行：日本甲虫学会 〒658 神戸市東灘区御影山手2丁目19-8 大倉正文方
	電話：(078)811局2706番 郵便振替口座 大阪9-39672番

### 仮製本仁己止兵世天(3)

後藤光男

(利)

前項で「Fuji Xerox バインダー1」による「無線とじ」に触れたが、最近手許の文房具を使って「無線とじ」に似た製本を試みてみた。対象は中根博士が「昆虫と自然」に連載された「日本の甲虫、新シリーズ№1～60, 1973～1983」である。専用ファイルに合本しているの、必要な巻号をはずして落丁の有無を確認の上、各冊のホッチキス止めをはずした。ついて頁の下段や末尾の埋草に印刷された紹介文や短報の部分を白無地用紙で隠して、準備を終えた。複写の段階であるが、その始まりが奇数頁である号と偶数頁である号と二様になっており、またその終りも二様なので両面及び片面の複写で忠実に原本にしたがった。2頁のものはそのままよいが、4頁のものは中央の折り目を更に定規で折り目を強く付けて糊が背面によく密着するようにしてみた。いよいよ製本に入るが、まず背面を完全に揃える。同じ作業の繰返しにより完全に揃っているかどうか確認して、背面を糊付けできる巾を残してクリップで固定した。クリップもその形によって山型、ダブル、目玉、その他数種類店頭に見られるが、目玉クリップはその締め付ける力が左右・上下に均一にかかるので固定がよいように思えた。固定が終われば糊付けであるが、澱粉糊より合成糊の方が使いよく背面に一樣に薄く塗って、12～24時間乾燥させる。乾燥すれば表紙と題字の書き込みを行ない仮製本は終了であるが、表紙をつける前に背面を中心に表と裏にかけて固定と補強のために薄い和紙を貼り付けた方が望ましい。「日本の甲虫、№1～60」は背巾160mm.におさまった。

( 奴 )

私の手許に送られてくる学会誌・会報等に掲載されている解説記事と、ぜひ残しておきたい報文については複写をして、ルーズリーフノートに綴りこんでいる。以前はA5、B4版の4穴が主流であったが、現在は26穴がこれにとってかわっている。その用紙も白無地から色物まで多様であり、またいろいろな書式のものまで市販されていて使いよい。

私は複写に白無地用紙のものを買求めて使っているが、これも各社一様ではなく、また同じ会社のブランド、号数でも製造ロットによって均一ではないので、まとめ買いをしている。白無地用紙を大別すると、その26穴は四角穴のものと丸穴に2分される。四角穴のもので2ヶ所止め金ファイルに便なよう上下九段目の一部が半丸になっているものと一様に正四角形のものがある。丸穴のものも一様に、同一丸穴と横楕円形のものに加えて上下九段目がやや大きい丸穴のものに分けられる。用紙の四隅も丸く切斷化粧されているものと、直角のものに2分されることがあって、好みによって選定された方がよさそうである。

白無地用紙に複写をして、ルーズリーフノートに整理する利点は、必要な報文を集約してあるので、原本を必要なだけ取り出して並べなくても事が足りる点であるが、図版の複写で凸版の場合は支障はないが、写真版では鮮明をかくので、この場合はあらかじめ網目スクリーンフィルムを使って複写をした方が原本に近い結果が得られる。

( 留 )

複写の際に一枚ものでも折り目があると用紙に黒い線となって複写される。まして2枚を継いだ場合とか複写ガラス面より狭い場合には、継ぎ目や紙の縁が黒線となって複写される。あまりこの黒線が気にならない方は別として、私は極力これを防止するよう複写に努めている。黒線を消すためにその部分を白無地紙で被っても、被った用紙の縁が黒線になる場合が多い。

私はこれを防止するのに製図用のチャンピオン紙を使っている。折り目、縁等必要な部位に細切紙をあてがって複写すれば、ほとんど黒線があらわれるのを防止できる。これまでの経験では、奇数頁はそのまま複写ができるが、偶数頁はどうしても「綴じしろ」の点で左右どちらかへ位置をずらさなければならぬので、黒線が出ることが多いように思った。この点甲虫談話会の「甲虫ニュース」は、切斷寸法が規格のB4版となっており、上下左右の余白も均一化されているので、原稿をずらすことなく複写をすることができた。

新 入 会 員

（昭和57年1月1日現在）香葉支社支部の役員



住 所 変 更

308334  
27832  
31013



退 会



（昭和57年1月1日現在）

## 昭和57年度収支決算書（昭和57年1月1日より12月31日まで）

収 入 の 部		支 出 の 部	
会 費	1,500,600円	印 刷 費	2,286,000円
バックナンバー代	202,300	通 信 費	271,030
別 刷 代	66,750	消 耗 品 費	84,000
寄 付 金	500	大 会 費	34,540
函 鑑 印 税*	91,330	幹 事 会 費	10,400
雑 収 入	41,178	雑 費	6,650
仮 受 金	368,334	仮 受 金 引 当 金	368,334
前 期 繰 越 金	579,825		
次 期 繰 越 不 足 金	210,137		
計	3,060,954	計	3,060,954

\* 現在までに学会へ繰入れられた印税合計 2,166,282円

## 特別会計収支計算書（会報発行基金）

昭和57年 1. 1	前 期 繰 越 金	1,105,677円
1. 20	60万円貸付信託収益金（56. 7. 20～57. 1. 19）	14,859
3. 26	金銭信託収益金（56. 9. 26～57. 3. 25）	3,223
5. 20	40万円貸付信託収益金（56. 11. 20～57. 5. 19）	10,426
7. 20	60万円貸付信託収益金（57. 1. 20～57. 7. 19）	15,054
9. 26	金銭信託収益金（57. 3. 26～57. 9. 25）	4,129
11. 20	40万円貸付信託収益金（57. 5. 20～57. 11. 19）	9,776
12. 31	次 期 繰 越 金	1,163,144

## 「ねじればね」の全号が揃います

本誌「ねじればね」は26号までの更半紙から27号より上紙白厚紙となりましたが、印刷部数が「昆虫学評論」の発送部数を少しく上廻る程度しか印刷しておりませんので、最近号を除いてほとんど絶版です。一部の方々の要望によって絶版号の複写をして全号揃えています（原本の在庫がある号は原本）。複写号数によって単価が違いますので、ご照会下さい。なお、評論バックナンバー43号10頁；各種ラベル類43：12；専用台紙47：5；4.5P活字セット34：12；35：7；36：8に掲載しています。評論については大倉まで、他は後藤までご照会下さい。

## — あ と が き —

今朝10日のテレビが大阪地方の晴天つづきは稀有だと報じていましたが、本紙がお手許に届いたところは梅雨の中休みとなっていると思います。沖縄に続いて南九州が梅雨入りをしたのに、北九州以北はまだ梅雨入りの宣言がなく、ぼちぼち田植えに支障をきたす事態が生ずるのではないかと考えています。梅雨の前触れの降雨があつて入梅になるケースと、晴天つづきのまま入梅になる2コースがあるようですが、本年は完全に後者に当ります。拙宅のベランダの蛍光灯への飛来甲虫も申訳程度で、除虫剤撒布の結果よりも、むしろ「雨ナン虫コズ」の結果と思います。「昆虫学評論」もご覧のように大冊となりましたが、引続いて次号以降も大冊の予定です。論文の消化と出版費の円滑をマツチさすべく努力しておりますが、先輩諸賢のより一層のご支援とご協力を希う次第です。

(10日朝 後藤記)